があるが、五頭より四頭位を示した。左肩に掲げてあるのは骨描きであつて、正しい骨骼といふ譯ではないが、人間の動作の姿勢を此の如き簡略なる骨線で表はす遣り方がある。それを照會旁〻茲に掲げたる人物の骨線を示したのである。下の圖を見れば分る。

(B)に於ては重心といふことを說いた。直立しても、背後へ反つても、前へ蹋んでも、重心を通る垂直線は兩脚趾の間へ落ちるものであつて、之で體軀を支へて居るのであるが、走る時歩む時は重心からの垂直線は常に兩趾から外へ落ちる樣になるので、それを支へる爲めに體の前進運動が始まるのであるといふことの說明になる。簡單なる骨線が如何によく働いて、是等の說明に不便なく感ずるかは此圖で分るであらう。

(C)は省略の順序を示して、最後に至つて此の如き離れ離れの線の樣になつても能く全體の格好を表はすものであることを示し、實際の寫生の時などには、人の動作の姿勢は決して連續した良い線などで取れるものでないといふ事をも說明する資料とする。

(D)の皺の省略も前同樣である。

第二圖　人物各種

目的

人物スケッチの練習。

教法

人物の各種のスケッチ例を示して、其姿勢が活動して居る瞬間に如何に取れるものであるか、又どんな取り方をするものであるかを示した。附圖に於ては、其スケッチの方法を説明した。凡て斯樣なスケッチは、前圖にも云つた通り連續した線などで取らうとしては迚も出來ないものであつて、(A)(B)兩圖に示した「1」の樣に、先づ其要所要所を離れ離れに見當を附けるものである。さうして向ふが活動して居るのをヂッと見詰めて居て、前の樣な姿勢が目に入つたときに其瞬間に頭の記憶に殘つた形を段々之に附け加へて行つて、即ち2、3、4、等の順序を經て遂に5、6の形を得るに至るものである。故に本圖の中に示した樣な種々の姿勢を得やうとするには、何程熟練した畫家と雖もさう易々と描けるものではないことをよく了解させねばならぬ。本圖の右下隅に示した一例の如きは、最も省筆したスケッチの例である。此位にして置いても、或意味は現はれるといふ事を示したものである。

此本圖を附圖に示した描方に準據して數種練習さして

見て、それから實際のスケッチに入らせるが順序であらう。

第三圖　玉葱

目的

色彩の練習を主として、兼て構圖の工合をも會得せしめる。

教法

靜物を用ひて複雜する色彩の調和を練習せしめんとする圖であるが、大體に於ては赤と綠の餘色の關係になつて居るが、それが至つて温和に調和して居るのは、黄の共通色が加はつて居るのと、明色、暗色、砂色の三變化が複雜に實行されて居る爲めである。此圖に於ては又机上の反映といふ事も説く必要がある。

本圖は濃厚なる配色の爲めに輪廓線は如何樣になつて居るかゞ不明である故、附圖に於て其の形を説明して置いた。附圖の形は基紙へ貼つたのゝ一例にもなる。

第四圖　夕景及夜景

目的

時間に因つての色彩の相違を示して水彩練習の資料と

する。

教法

大體で云ふと夕方は一體は橙色を帶びる、或は紫に傾く。夜は一體に青味を帶びる、或は綠に傾くといふ相違がある。此根本をよく了解して、全體上の色の感じを誤らぬ樣にすべきである。

前圖の例に倣つて、本圖の輪廓線は鮮明でないから附圖に於て明瞭に表はして置いた。さうして烟と船との各種の例を此水邊の圖が出たのを機會に揭げて置いて、前卷の風景の部分的資料の補遺とした。

第五圖　海

目的

從來の練習が凡て固形體のものばかりであつて、習慣が附いて居るといふ點から、又さうでなくとも一般の人が多く認めるといふ點から、何れからしても圖の組立の材料には、固形體の物を見て流動體や氣體のものは目に入れぬ傾がある。即ち本圖の如きは固形體の物で云へば單に山と岩と砂とであつて何でもないと見る材料である。それが雲の變化、水の色といふものが伴つて、色彩の上から非常に

立派な研究資料となるものだといふことを説示するのが本圖の要點である。海といふものを描く參考資料たるは云ふまでもない。

教法

前述の次第で本圖は眞に色で成立つて居る圖であつて、前々の圖の樣に組立の複雜は左程ない。故に色の調和に殊に重きを置くべきものである。

附圖は此目的に伴つて、天候や時間の變化に隨つて如何に同一圖の濃淡に變化を及ぼすかを示した。反對に云へば、濃淡を變化させれば如何に圖の趣が變つて來るかの説明例である。「イ」は空が曇つて水面が光つて居る場合、「ロ」は空が快晴であつて少し風でも立つて居る樣な場合、即ち水面の反射がなくなつて如何に黑く見へて來るかゞ要點である。「ハ」は朝霧でも掛つて居る樣な場合、全體が柔かな調子になつてしまふのが要點である。

第六圖　和歌の浦

目的

有名なる名勝の地を撰んで、從來習ひ來つた家、木、岩、水、雲、船、人を皆一圖のものとして練習をさせる。色の調和を目

的とするのは云ふまでもない。

教法

凡て前々の風景に於ける通りであるから説明を略する。

美術作品圖（一）　鉛筆寫生の二樣式

人の顔だけとしての精密な遣り方はまだ掲げなかつたから、それの材料にもなり、又同じく鉛筆畫と云つても、此の如くまるで違つた樣式があるものだといふ事を示して、同じく生徒の思想界を廣くせしむる目的に使ふ。其描方の味等は云ふまでもなく注意させたい。

美術作品圖（二）　佛國圖案　人物及動物

前卷には動物が模樣になるのを示すのを主にしたから、茲では人物がこんなに模樣になつてるといふ例を示し、併せて動物をも添へた。其巧みな模樣化と、及び自在なる遣り方とを見させん、趣味の涵養と思想界の擴張とに資する樣にしたい。

○第七卷

自在畫に於ては前來學修した處を進めて猶其補遺を掲げ、併せて美術講話資料の作品圖を載せ、圖案に於ては賞牌の考案を主として器形圖案の一般を示した。

第一圖　建築

目的　ペン畫の練習。

教法　ペン畫はまだ正しき説明がしてないから、本圖に於て之を試みることゝした。附圖に示したのは其方法であつて、(A)圖の中の「甲」は背景を濃くした場合、「乙」は點で描き上げたもの、「丙」は普通の使用法である。(B)圖はペンを使つて描き或は塗るのに「イ」「ロ」「ハ」「ニ」の如く線でするものがあり、「ホ」の如く點でするものがあり、「ヘ」「ト」の如く交叉せるもの、「チ」の如く編んだ樣にしたもの、「リ」の如く塊りにしたもの等があるといふ事を知らしめ、場合に應じて用ゐさせるのである。

第二圖　船

目的

水彩畫にて複雜なる色彩調和の練習。

教法

前卷風景の水彩畫の程度を進めたものであるから總て前卷の取扱と等しい。

第三圖　人像

目的

人物石膏寫生の參考圖とし、併せて肖像畫に於ける陰影の參考資料とさせる。

教法

輪廓線を取れば附圖の如く、陰影を附ければ本圖の如くになるといふ事を對照させる。陰影の練習の最も困難なる例である。

美術講話參考資料

茲に掲げた六枚の寫眞は、簡單に美術史を說く資料にしても宜しいし、又は單に美術上の講話として系統なく話す材料としても宜しい。其中外國の繪畫は現代のものに大に意味と特長とがあつて、時代の進步に伴つて全く現在ど

密接して居るが、日本の繪畫は西洋文明の輸入に因つて全く從來の脚塲を失ひ、而して現代に密接して大に從來以上に發展した新意味を成したかといふと、まだ其處までは行つて居ないらしい。右の次第から西洋繪畫は現代を主として紹介し、日本の繪畫は古畫を主として紹介した。

外國の部

筆者個々の名は掲げたけれども、玆には其個人の傳記を說くのが主ではない。古と今と、國と國と、流派と流派との比較をさせるのが主意である。

全體に於て伊太利、獨逸、佛蘭西、英吉利と四國の畫を一枚づゝ掲げた。さうして伊太利は古畫に於て最も特長があるから、其中人口に膾炙せるラファエルを掲げ、其趣味を味はせると同時に、又古代は現代に比べて宗教的に傾いて居た事、時間、光線、空氣等の研究の不十分からして來た所の描方の相違、硬柔の差等までは此寫眞でも說明が出來るが、色は迚も想像することは出來ないから是れだけは仕方がない。

獨逸は理想畫の代表としてベックリンを掲げた。理想畫の代表としては、まだ〳〵隨分晦澁幽遠なのもあるけれ

ども、教科書といふ性質上止むなく、避けて此圖にしたので、充分に味はふことは出來ぬかも知れぬが、併し現世を超絶した樣な畫題と作風とは略〻察する事が出來やうかと思ふ。

佛國は印象派の代表としてピサローを取つた。是もまだ外に人はいくらもあるけれども、熱鬧なる市街の冬景色といふ所が他の圖に對して材料も變り、又描方がよく印象派の特徴を呈して居ることが寫眞でも分るから取つたのである。ラファエルなどに比べて如何に近代的で、柔味ある描方であるかは、比較すればすぐ了解が出來るであらう。

印象派とは最近に起つた流派の名前であつて、畫家の目に印象した感じの通りを描く、室内で研究した理屈などに拘泥するに及ばないといふのである。日本の洋畫も大に此派の影響を受けたものである。

英國は水彩畫の代表として本圖を取つた。水彩畫を以て世界に誇つて居る國であるからして、其特徴を知らしめ、併せて此の如き材料が水彩だか何だか分らぬ位に充分に描きこなせて居る所を味はしむべきである。水彩畫は雜誌の挿畫の如きものと思つて居る生徒等には、よい説明資料になるであらう。

要するに宗教的羈絆を離れて、只の人物、只の風景、只の動物と描き得る樣にあつたのが近代畫の傾向であつて、それに伴つて描方と色彩の研究の上にも非常の變化と發達とを來したといふ事が了解さすべき要點である。

日本畫の部

日本畫に於ては、最も永く繪畫上の歷史を支配した土佐派式の描方と、狩野派式の描方とを比較對照さした。雪舟を狩野派と云つたら流派上からは間違であらうが、足利時代の繪畫の遣り方を最も人口に膾炙せる所に隨つて狩野派式と通俗に呼んだまでゞある。説明すべき要點は、土佐式の畫風は足利時代に至るまで全く日本畫を支配した所である事と、其材料が多く人事上の事である事、彩色の重厚艶麗なる事、卷物や襖などに描かれた事等である、狩野式の畫風は足利時代より以後を支配した畫風であつて、其材料には風景、神仙が多く、墨畫が多くて隨つて雅致に富み、掛物といふものが始めて起つた事等である。片方の配合面白き歷史畫と、片方の脫俗なる筆致の風景とを對照せしめたなら、其一般は想像が附くであらう。

紙幅の都合に因つて掲げた圖數は是れだけであるが、説

明すべき點は決して是れのみに限るものではない。明治の畫に影響した德川時代の光琳式や南宗式などは、大に說明の價値のあるものであらう。

中等教育圖畫教科書小解　終

明治四十三年十月十五日印刷
明治四十三年十月廿六日發行

著作者　東京市牛込區富久町九十九番地　圖畫共勵會
發行者　東京市本郷區本郷湯島一丁目五番地　株式會社泰東同文局
代表者　東京市本郷區本郷湯島一丁目五番地　川村理助
印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　神谷岩次郎
印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社

不許複製

發行所　東京市本郷區本郷湯島一丁目五番地　株式會社泰東同文局
關西大販賣所　大阪市南區心齋橋筋一丁目　松村九兵衛

261
655

070225-000-2

特65-587

中等教育図画教科書小解

図画共励会／編

M43

CEC-1266

261
655

特
5